

母の糸遊び

— 手芸と絵本のゆたかな出会い —

Mother's Playing with Threads

— *Felicitous Encounters of Handicraft and Picturebooks* —

石原 敏子
ISHIHARA Toshi

Picturebooks, dealing with the theme of handicraft, as well as those represented through the medium of this craft, are introduced with a brief commentary on each.

キーワード
絵本・手芸絵本

ひとは、地球上に現れたときから、自分たちの手で生活を助けるための道具を作ってきた。火をおこし、水を汲み、動物を捕えるために、必然からいろいろな道具や武器が作り出されていった。また、寒さや動物たちから身を守るため、衣服も工夫された。

手から生まれた道具は、時とともに、必然性のみならず、ひとの生活を豊かにする目的を果たすものとなっていった。そこに意匠が加わり芸術性が賦与されるようになり、道具から作品へと変容することになった。

今日、「手工芸・手芸」の生活必需品としての意味合いは、薄れてしまった。それでも、多くの手工芸品・手芸品が大切にされ、また、それらを作ることも盛んである。その理由は、その作品にひとの手の暖かさが感じられるからであろう。

我が家にも素人作りの手芸品がたくさんある。パッチワーク、ビーズ・アクセサリー、クロスステッチ、ハーダンガー、こぎん刺繍、サンドブラスト・グラス、木彫、ステンドグラス、革工芸、エッグ・アート、押し花、プリザーブド・フラワー、切り絵、万華鏡、陶芸など、すべて、80代半ばの母の手によるものである。20数年前父が他界してからの一人の時間を、母は針やはさみ、彫刻刀で埋めていったのであろう。その作品は膨大な数になっている。2010年6月、その作品の一部を人々に見ていただく機会を持った。83歳にもなると体力も気力も落ち、

かつてのように活動できなくなっている。そうした母が、絶えず挑戦を続けていることにはそれなりの意味がある、そしてそれが後に続くものに元気を与えることになる、と考え、姉が住む静岡にあるギャラリーで、一週間の展示会を開催することにした。京都で漆芸に携わっている姪（母から見れば孫）の作品も一角に並べての作品展となった。

この作品展にあわせて、手芸に関する絵本を集めた。これらの絵本を会場に並べ、来場下さった方に実際に手に取っていただき、また、会場では、手作りや家族の絆を扱う絵本や文学作品、エッセイの朗読会を二回催し、絵本について解説を行った。以下に手芸の絵本作品30点を紹介する。

手芸・手工芸の絵本作品には、手芸・手工芸を表現手段として用いたものと、それをテーマにするものとの大別することができる。まず、前者から見ていくことにする。

I. 手芸を表現手段として用いた絵本

(1) Supple, Elizabeth, illustrated by Bailey, Corinne Ringel. *The Sampler Story Book*. Saalfield Publishing Company, 1934.

“The Sampler Story Book”という題名が示すとおり、各種取り合わせのストーリーに、いろいろな刺繍の技法で描いたイラストを配した絵本である。ストーリーもイラストも、ともに「サンプラー」であるところに、この本の創意が伺える。しかも、それが子どものアイデアであったとは驚きである。

病気のこどもたちの施設のために資金集めが話題になったとき、ある小学校では、自分たちが作ったものを上げたいということになった。そこで、ストーリーと絵を創作し、そのサンプルの中からいいものを選ぶというアイデアから、「サンプラー」にしようと思ったと、この絵本のイントロダクションで説明されている。

どのストーリーも、子どもの生活を生き生きと描きだし、機転がきいていて素晴らしい。その上、シンプルな刺繍作品が、この本に独特な味と暖かみを加えている。この本は、1934年に出版された。アメリカ絵本史上比較的早い時期に、手芸を用いた本で、それも子どもによるこんな素敵な本があったとは、うれしい発見である。

(2) Brüder Grimm. Nitzsche, Gisela, Nitzsche, Peter. *Tischchen Deck Dich, Goldesel und Knüppel aus dem Sack*. Verlag Karl Nitzsche, Niederwiesa, 1978.

グリム童話“The Wishing-Table, the Gold-Ass, and the Cudgel in the Sack”を扱うドイツ語の絵本である。この作品では、登場人物（動物）や場面を描くのに、手芸材料を用いている。布、フェルト、レース、毛糸のほか、ボタンやホック、安全ピンなどがアクセントとして使用されている。ヤギの毛並みに用いられた毛糸が効果的である。エンドペーパーには、赤を背景

として赤いレースから切り取られた花模様や、フェルトで作られた花が並び、華やかで明るく、このストーリーを暖かく包み込むような印象を与えている。

(3) Wegener, Hannelore, Götze, Klaus. *Till Eulenspiegel*. Verlag Karl Nitzsche, Niederwiesa, 1976.

中世ドイツの伝承文学に姿を現したトリック・スター、ティル・オイゲンシュピーゲルのエピソードを描いたドイツ語の絵本。登場人物は人形で表され、小道具は手作りの小物である。配された人形からはその動きが伝わり、まるで人形劇を見ているような楽しい気分になる。

(4) Gleick, Beth, illustrated by Jocelyn, Marthe. *Time Is When*. The U.S.: Rand McNally & Company, 1960; Canada: Tundra Books, 2008.

3歳の息子から「時間ってなに？」という質問を受けた作者 Beth Gleick が、就学前のこどもにもわかるように、「時間」の概念の説明を試みた絵本である。「ボールをついたり、跳んだり、ハローと言ったり、ページをめくったりするのが、1秒だよ」といったように、こどもの身近な出来事に結び付け、分、時、日、週、月、年へと順に進め、季節の移り変わりや、過去・現在・未来といった時間の流れの感覚へと導いていく。

こどもにとっては壮大な「時間」という概念が、自分が目にする事柄や遊びと結び付けられることで身近に感じられるよう工夫されているが、それを手描きの絵に布のアップリケという柔らかい材料を重ねて表現することで威圧感を感じさせないところに、この絵本が成功している大きな理由があると言えよう。

(5) にしまきかやこ『ぼくたち1ばんすきなもの』こぐま社, 2003.

にしまきかやこさんと言えば、『わたしのワンピース』（1969）を思い浮かべる人が多いだろう。うさぎが出合うさまざまな場面が、ミシンで縫ったワンピースに模様となって映し出されていくというもので、「手芸」をテーマとした作品である。

ここに挙げる『ぼくたち1ばんすきなもの』は、手芸を表現手段として用いた数字絵本である。みつごのこぶたが、6等分した誕生日のケーキを5人家族で食べたあと、残った最後の一切れをすずめたちにあげ、そのおかげで友達になるというストーリーが語られている。ざっくりとした柔らかい刺繍布の薄いページ色を背景に、アップリケと刺繍で描かれる3びきのこぶたたちからは、その純真さと優しさが伝わってくる。他の表現手段では望めない効果であろう。

(6) 宮澤賢治／文 清川あさみ／絵『銀河鉄道の夜』リトルモア, 2009, 2010.

この作品は、上記の『ぼくたち1ばんすきなもの』と同様に、手芸を表現手段としているが、その印象は全く異なる。清川あさみさんは、若手の刺繍作家で、この作品のほか、『幸せな王

子』(2006)や『人魚姫』(2007)を、布、糸、ビーズを用い、美しい絵本に仕立てている。宮澤賢治の『銀河鉄道』という不思議な世界を表現するのに、神秘的な光を放つビーズやスパンコールは、まさに打って付けのマテリアルと言える。ビーズ独特のどことなくはかなさを感じさせるような色や風合いが、賢治の神秘的な宇宙観をよく表している。「銀河鉄道」のストーリーは、絵本とするには大部であるが、清川さんはそこにたくさんのビーズ刺繍作品を配することに挑戦されている。そのためか、なかには少し緊張感に欠ける作品が見られるのが残念である。

(7) Hissey, Jane. *Little Bear's Colours*. Great Britain: Hutchinson, 2002, 2003.

子どもに色や形の名前を教える本である。幼い子供の注意をひくように、毛糸や布で作ったぬいぐるみのイメージを用いている。実際に作られた人形を写真に撮ったのか、絵で描かれているのか判別しがたい。人形作家の名前の記載がないので、後者の可能性が高いと思われる。

(8) Brown, Cheryl. *Herbert the Snail*. New York: Van Nostrand Reinhold Company.

さまざまなスタイルの刺繍を用い、かたつむりハーバートの成長を描く、ほのぼのとした作品である。いつも自分の青い殻を自慢しているハーバートとは、だれも友達になってはくれない。そんな彼のところにピンク色の殻をもったかたつむりが現れ、彼女に諭されることで、ハーバートは、“while it's nice to be important, it's more important to be nice.”であることに気付くというストーリーである。単純な構成とパターンで画面が作られており、ハーバートの首の曲げ方や、目の付け方の工夫だけで、彼の気持ちがよく描き出されている。

この絵本の扉から、作者が12歳の少女であると知り、おおいに驚いた。しかし、考えてみると、若い彼女の感受性こそがこの作品のみずみずしさの由来であったことに気付かされる。この作品は、英語(国語)の授業のプロジェクトとして創作されたのであるが、それが、地方の刺繍コンテストに出品され、刺繍作家のJacqueline Enthovenの目にとまったということである。Enthovenは、「布や糸が子どもたちの気持ちを現し、かれらが自分のストーリーを語る」上で大きな可能性を持つと考え、子どもの創造性を伸ばす重要な手段の一つとして、教育の場において刺繍がもっと浸透していくことを望んでおり、*Stitchery for Children* という本も出版している。実際、こうした自由な表現を許す機会が、学校教育に多くあることが望ましいと言えるだろう。筆者自身が受けた手芸のクラスにもこうした自由があったら、もっと楽しめていたかもしれないと思ったりもする。

(9) Stevenson, Robert Louis, *Selections from A Child's Garden of Verses*. Stiches by Tiffany, Virginia. Wisconsin, Golden Press, 1969, 1975.

こどもの情景をうたったステューブンスンの詩集、*A Child's Garden of Verses* は、いろいろなイラストレーターにより絵が付けられ、出版されている。その中でも、特に楽しい気分を作

りだしているのが、Virginia Tiffany が刺繡とアップリケで視覚化を試みたこの作品である。筆者は、かつて Eve Garnett（1952）の白黒の線画イラストに導かれてこの庭に入り、そこの雰囲気慣れ親しんでいたが、この Tiffany の絵本は、全く異なる雰囲気の詩の世界へと誘ってくれるのが楽しい。

(10) Von Olfers, Sibylle. Translated by Zipes, Jack David, illustrated by Smith, Sieglinde Schoen. *Mother Earth and Her Children: A Quilted Fairy Tale*. Illinois: Breckling Press, 2007.

(11) Smith, Sieglinde Schoen, *Mother Earth's ABC: A Quilter's Alphabet & Story Book*, inspired by *Mother Earth and Her Children* by Sibylle von Olfers.

(10) *Mother Earth and Her Children* は、もとはドイツで出版された Sibylle von Olfers の *Etwas von den Wurzel Kindern*（1906）という絵本である。ドイツ生まれのキルト・刺繡作家 Sieglinde Schoen Smith は、幼いころ、この絵本に親しんでいたが、後日大人になって再会し、キルトを用いて表現を試みた。Olfers と言えば、『かぜさん』（1910）や『ちょうちょのくに』（1916）などでもよく知られているように、自然と子どもの関わり合いをやさしい文と繊細なイメージで描き出すドイツ古典絵本の傑作を生み出した作家である。*Mother Earth and Her Children* においても、春の到来とともに Mother Earth に目を覚まされた子どもたちが、色とりどりの衣装を準備し春から夏の花になっていく様子が表されている。Smith は、その過程を丁寧に美しいキルトでたどっている。当時、彼女は最愛の息子を失い、その悲しみをまぎらわすべく、Olfers の描く自然と子どもの生命力を無心に縫いとった、ということである。

さらに、この作品から、(11) *Mother Earth's ABC: A Quilted Alphabet & Story Book* が作られた。Olfers の作品に想を得て、Anne Knudsen がアルファベットの文字で始まる詩を書き、Smith がアップリケと刺繡で描いている。妖精の子どもの誕生をうたう Knudsen の詩は創意に富み、リズムも心地よい上に、Smith による花や虫たちの刺繡に飾られたグラデーションカラーのバティック布のアルファベット文字がひときわ美しい。巻末には、本の中で用いられているアップリケと刺繡の仕方の解説が載せられており、読者も創作の世界へと誘われる。キルト愛好家にはもちろんのこと、そうでない読者にも、大いにアピールする絵本である。

(12) 藤城清治 『ぶどう酒びんのふしぎな旅』 講談社、2010年

(12) (13) は、ともに「切り絵」を手法として用いた絵本である。

切り絵と言えば、日本の影絵作家である藤城清二さんの作品を思い出す。藤城さんは黒い紙を切り、それに色の紙を重ねたり、背後から光をあてるなどして、カラフルで幻想的な世界を作り上げている。

藤城さんには多くの有名な作品があるが、ここでは1950年、彼が26歳で初めて作った絵本

で、86歳になり再び挑戦し作り直した、アンデルセンの童話『ぶどう酒びんのふしぎな旅』をあげておく。若い時のものは白黒だったそうであるが、今回はカラー作品になっている。「あとがき」で、このぶどう酒びんの数奇な運命と自分の人生とがオーバーラップして、ときには涙ながらに切り抜いていることもあったと述べておられる。「60年の長い人生を乗り越えてきた、経験と技術と感動のすべてをこめて作らなければ、再び作る意味はないだろう」(絵本あとがき)という藤城さん自身の言葉からも伺えるように、この絵本には、強い信念を持ち全力投球した様子が、気迫となって感じられる。作家の情熱に負けないくらいの誠意をもって接したい作品である。

(13) Duffy, Carol Ann, illustrated by Ryan, Rob. *The Gift*. Great Britain: Barefoot Books, 2010.

ある少女が森のなかに小さな空き地を見つけ、死後はここに葬られたいと思う。そこへ年老いた婦人が現れ、少女が編んでいた花の首飾りと引き換えに、その願いをかなえてあげようと言われ、少女は首飾りを渡す。その後、少女は生涯をとおしてこの空き地を大切にし、花や石で飾っていく。ついに最後の眠りの夢の中で、彼女がその空き地に立つと別の少女が現れ、花で作った首飾りを彼女にかけてくれる。こうして、この美しい花と石の空き地がいつまでも守られ、次の世代へと受け渡されて行くことが示される。

この優しさに満ちたストーリーが、切り絵という手法で表現されている点が興味深い。ストーリーの登場人物には名前がなく、“the girl” (その後成長するにつれて、“the woman,” “the old woman”) と表されているだけであるが、その無名性を表すのに、シルエットを用いた Rob Ryan の選択は適切であると言える。Ryan は、一枚の紙にパターンを切り、それにスプレー・ペイントを一色かけ、写真に納めるという方法を取っている。写真を撮る際に、パターンの影が少しあらわれ、それが絵に深みと表情を与えている。こうして、無数の花々が咲き乱れ木々の林立する森のなかや、家々に降りかかる月夜の星屑、雪が舞う街角、そして画材や調度品の置かれた室内などが、丁寧に繊細に表現されている。

(14) Ehlert, Lois. *Market Day: A Story Told with Folk Art*. New York: Harcourt, Inc., 2000.

この絵本は、遠くの市まで買い物に出かける一家の一日を描くものであるが、その描き方がユニークである。副題が示すように、作者自身が集めた (なかには数点知人からの借り物もあることが注でわかる) フォーク・アート (民芸品) と、Ehlert が作った数点の小物を並べ、そこに刺繍を施して画面を構成し、写真撮影したものが使用されている。赤や黄色、緑、紫などの原色使いが、フォーク・アートの素朴さを強調しており、印象的である。最後の見開きには、作品中に用いられたフォーク・アートが全て並べられ、それぞれ国名と材料が示されている。

このページだけを見ているだけでも、楽しい。

最終ページにおいて作者は、収集したフォーク・アートについて、自分の趣味に同調しない読者もいるだろうが、美を感じるセンスは個人個人で異っており、さまざまな表現形式がある、と述べている。手作り品の価値は創作者それぞれの美意識を認めることにあると主張し、個々の創作意欲を高く評価している点に注目しておきたい。

(15) Mortenson, Greg and Roth, Susan L. *Collages by Roth, Susan L. Listen to the Wind: the Story of Dr. Greg & Three Cups of Tea*. New York: Dial Books for Young Readers, 2009.

作者 Greg Mortenson は、ヒマラヤの K2 登山挑戦中に遭難し、命からがら下山したパキスタンの Korphe という村で介抱してもらい、元気を回復することができた。そのお礼として、この村には学校の学舎がないと知った作者は、校舎の建設を決意し、さまざまな苦難のすえ、村人の協力のもと成功にこぎつけた。この経験を記した *Three Cups of Tea: One Man's Mission to Promote Peace... One School at a Time* が、2006 年に出版されると、たちまち *New York Times* のベストセラーとなった。その後、ヤング・リーダーズ版が出され、2009 年には絵本版が出された。

大人読者対象の *Three Cups of Tea* は、作者の視点からの描写であるが、絵本では、村の子どもたちが語り手となっている。そこからは、学校作りに自分たちも参加しているという子どもたちの大きなよろこびが伝わってくる。紙や布によるコラージュからは、あたかも子どもたちが美術の時間に作った作品であるかのように、素朴さや率直さが感じられ、内容とうまくマッチしている。おとな、ヤング・アダルト、子どもが、それぞれに、同じ作品を楽しむことができるという、貴重な経験を可能にする作品としても、意味深い。

II. 手芸・手工芸をテーマとして用いた作品

(16) Flournoy, Valerie, pictures by Pinkney, Jerry. *The Patchwork Quilt*. New York: Scholastic Inc., 1985, 1996.

おばあちゃんがキルトを作り始めるが、途中で病気になり、続けることができなくなる。それを孫が母親の手を借りて完成させる、という物語である。キルトに用いられる布の一枚一枚が家族の歴史を語っているが、仕上げの段階で、孫は「だれかの分が足りない」と気付き、病床のおばあちゃんのベッドカバーの一部を切り取り、自分のキルトに付け足して完成する。

絵本は、おばあちゃんの家族への心遣い、そして家族のおばあちゃんへの暖かい気持ち、世代間の交流、そして家族としての一体感を的確にとらえ、読者のこころに訴える。ページユ色の背景を効果的に使い、優しいタッチで描かれる水彩画が、このアフリカン・アメリカン一家

の生活をいきいきと映し出している。ストーリーの内容とともに、Pinkney の筆致が、この絵本を、穏やかな印象を与えるものになっている。Martin Luther King Jr. の功績と King 夫人の平和と市民権獲得への努力をたたえ、子どもやヤング・アダルトを読者とするすぐれた本を書いたアフリカン・アメリカン作家にアメリカ全米図書協会から贈られる Coretta Scott 賞 (1986年) を、この絵本が受けているのも頷けるところである。

(17) Jonas, Ann. *The Quilt*. The U. S.: Greenwillow Books, 1984, Puffin Books, 1994.

はじめておとな用のベッドで寝る子どもの不安を描く作品である。両親に作ってもらったキルトを敷いたベッドにペットの犬と入るが、少女はなかなか眠れない。そのうち彼女はまどろみ、夢の世界に入っていく。離れ離れになってしまった犬をさがして、町のなか、薄暗いトンネル、恐ろしげな森などを抜け、崖の下にいた犬を見つけたところで、ちょうど夜が明け眠りから覚める。ペットの犬はベッドの下にころがっていた。夢の中で彼女がさまよっていたのは、このベッドカバーのパッチワークに用いられている布の模様をたどっていたのである。

絵本の中心をなす黒色を背景とした夢の世界 (第6～17見開き) が、眠りに入るまで (第1～5見開き) と目覚めた後の (最終見開き) 白を背景とする現実世界に包み込まれるように配されている。この構成が、子どもの覚醒と睡眠、期待と不安の交錯を饒舌に描き出している。また、ベッドカバーの縁取りに使われている布の小花模様をエンド・ペーパーに使用することで、キルトから生み出された少女の想像の世界を強調することに成功している。

(18) 堀川波『Patch Work: ふたりのパッチワーク』 白泉社, 2006.

二人でパッチワークを作るように、ボーイフレンドとの関係を築き上げていく女の子の物語が、パッチワークを手段として語られて行く。若い女性を読者対象としたおしゃれ絵本である。内容的に発展がなく物足りないという感じが残るが、この本は、むしろかわいらしく心がなごむところに意味があるのだろう。

(19) Ringgold, Faith. *Aunt Harriet's Underground Railroad in the Sky*. New York: Scholastic Inc., 1992.

この作品は、上記三作品とは異なり、キルトを主題材としているのではない。絵本は、19世紀後半、“the underground railway” を用いて南部の逃亡奴隷を北部へと安全に導く役割を果たした、実在の人物 Harriet Tubman (1820-1913) を描いている。協力者たちは、キルトを家の外にかけることによって逃亡奴隷たちへの道しるべとしていたという歴史的事実を、この絵本から学ぶことができる。キルトには「暖かい」「家庭的」というイメージが一般的にあるが、このような人道的な目的を果たしていたことを知ることは、別な側面でのキルトの実用性を認識することになり、重要である。

(20) Ehlert, Lois. *Hands: Growing up to Be an Artist*. New York: Harcourt Inc., 1997, 2004.

先の「手芸を表現手段として用いた絵本」のセクションで、すでに取り上げた Ehlert の作である。彼女は、物作りの好きな両親のもとに育った。大工仕事やガーデニングをする父と、縫いものや編み物をする母から影響を受け、もの作りが好きになったということである。

この本では、父や母のように手仕事をしたい著者の分身である少女が、自分の仕事場を与えられ、両親の導きのもと、創造力を開拓していくというストーリーである。ねじまわし、金槌、刷毛、物差し、布、はさみ、針、糸、絵具、ブラシなどといった道具に加えて、作品としてできあがった鳥の巣箱や鍋つかみ、アップリケの人形などが写真撮影され、ページに配されている。どれもカラフルで楽しい画面であるだけでなく、実際にはさみや、子どもの手形、手袋などの形にページが切り取られていたり、また、絵具箱や道具箱が上下に開いたりする工夫があり、こどもが創意一杯に育っていく様子がうかがえる。手を使ってものを作りだす作者の喜びが伝わる素敵な本である。

Ehlert と言えば、すぐに *Growing Vegetable Soup* (1990) や *Color Zoo* (1997) といった絵本を思い浮かべるが、その色遣いや形の美しさは、この *Hands* が示すように、幼いころからのものを作る喜びに端を発している、ということが実感できる絵本である。

(21) Goffstein, M.B. *Goldie the Dollmaker*. Farrar, Straus, Giroux, 1969, 1997

両親をなくした少女が、二人の仕事であった人形作りを引き継いでいる。のこぎりで切ったような木は使わず、大切に丹精こめて木を削り、自分のところを映すように人形を作り上げていく。人形の作者として自分の名を知らしめることなど必要ではないと思っている。

ある日、自分の稼ぎには不相応な骨とう品の中国製ランプを購入したことで知り合いにからかわれ、自分にはものを見る眼がないと、彼女は自信を失ってしまう。しかし、夢のなかにそのランプの作者が現れ、それは美しいものを愛する人のために作ったということ、そしてその点で二人は共通していると言われ、彼女は自分の価値観を再び信じるようになるという話である。色をあえて使わずモノトーンにおさえ、背景を切りおとし、無駄なくやさしい線で描かれた絵が、手作り職人の心意気を伝えるストーリーにぴったりである。

(22) Shea, Pegi Deitz, illustrated by Riggio, Anita, stitched by Yang, You. *The Whispering Cloth: a Refugee's Story*. Pennsylvania: Boyds Mills Press, 1995.

1970年代半ば、ラオスで共産主義政府の兵士の襲撃を受け、メコン河を渡って逃亡し、タイの難民キャンプで暮らすフモン族の少女と祖母の歴史が、フォーク・アート（民芸品）の刺繍をモチーフに、そして表現手段として用いられて語られている。少女は、今は祖母と暮らしているが、すでにいとこたちが移住したアメリカに将来行くための旅費をかせぐため、フモン族

の女性が得意とする壁掛け (Pa'ndau) 作りに従事することになる。「自分の語るストーリーがないと Pa'ndau は作れない」という祖母の言葉で、少女が刺繍で描き始めたのは、ラオスからの自身の逃亡の様子であった。両親を襲撃で失い、銃弾の飛び交うなか祖母に背負われてメコン河を渡り、キャンプに入れられ、そこでの生活が刺繍で語られる。しかし、これではまだ完成していないと祖母に言われた少女は、さらに続けて、キャンプ外の生活を想像し、アメリカ行きの旅を描き、移住先での祖母やいとこと楽しい生活を刺繍することになる。これで作品は完成されるが、ちょうどその時布が風にあおられ、刺繍で縫い取った父と母が彼女にそっと触れる。このことで、少女はこの壁掛けは手離さないと確信することになる。

これまでの生活を描くだけでは十分ではないという指摘は、難民としての現実を生き抜くためには少女に夢を持たせることが必要であると祖母が看破しているからである。また、過去を振り返り、今ある自己を確認し、未来の自己を想像するという重要な行為を、自分たちの部族の伝統工芸をもって語っているところに、この絵本の意味がある。

絵本中、少女が自分のストーリーを刺繍で描いたとされている部分は、実際にフモン族の刺繍作家である You Yang が創作にあたり、この絵本のハイライトをなしていると同時に、この本に authenticity を与えることになっている。また、それ以外の、絵具を用いて描かれた絵のページでは、小さく描かれたカットは除き、大きいサイズの絵は、Pa'ndau によく用いられる縁取りで飾られており、このフォーク・アートの世界をよく表現している。

(23) Ray, Mary Lyn, illustrated by Cooney, Barbara. *Basket Moon*. 1999. Scholastic Inc., 2000. メアリー・ルイ・レイ／ぶん, バーバラ・クーニー／え『満月をまっつ』あすなろ書房, 2000年.

1900年以前から、ニューヨーク州のハドソンから少し離れた山間に住む人たちが、かごを作り生計を立てていた。その地で、一人の少年が、かご作りとして独り立ちする過程を描く。彼は、その仕事を町の人たちから嘲笑され心に痛みを受けるが、その経験を乗り越え、風の声や山の木々の声を聴けるようになり、自分の果たすべき役割を自覚するにいたる。木のリボンを「くぐらせて、だして、くぐらせて、だして (“under and over”)」繰り返しかごを編む様子は、風が枝の間を「くぐって、でて、くぐって、でて」吹いているのと同じであると少年が気付く場面は、壮大な自然との一体感を描き出し、感動的である。

著者は、作家であると同時に環境保護活動家であり、アメリカの手工芸について研究を行ったということ、日本語訳絵本の扉から知ることができる。一方、フォーク・アートを思わせる Barbara Cooney のイラストは、素朴な筆致で、自然の中で暮らすひとびとの質素で優雅な生活をしっかりと描きだしており、内容に合致している。

著者のあとがきによると、このかご作りの方法を継承する最後の女性が1996年に亡くなったということである。すでに作り手をなくしてしまったこの手工芸が、二人の芸術家の手によっ

て、絵本という形で後世に伝えられることは、有意義であると言えよう。

(24) Raven, Margot Theis. Pictures by Lewis, E. B. *Circle Unbroken: The Story of a Basket and Its People*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2004.

アフリカン・アメリカンの少女が、祖母の腕の中で、雨をも通すことのない “sweetgrass baskets” 「コウボウ（イネ科）で作ったバスケット」の作り方を教わると同時に、その由来—アフリカン・アメリカンの先祖たちが西アフリカから奴隷としてアメリカ大陸に連れてこられたときに持ち込まれ、以来サウス・キャロライナやジョージア州に伝わっている—を聞き、先祖とのつながりを感じ、その伝統の一部であることの誇りをうたう絵本である。

今もその美しさゆえに芸術品として重宝されるスイートグラス・バスケットは、バスケットとともに暮らした人々の歴史を知る手段としても、重要である。E. B. Lewis の絵とともに、「いつまでも壊れることなく続く輪」が、力強く描かれた絵本である。

(25) Mckissack, Patricia C., illustrated by Cabrera, Cozbi A. *Stichin' and Pullin' A Gee's Bend Quilt*. New York: Random House, 2008.

アラバマ州ウィルコックス郡、アラバマ河のほとりに、かつてはプランテーションであったアフリカン・アメリカンのコミュニティ Gee's Bend がある。ここで、女性たちが実用的な目的から作り出したキルト作りの伝統が生まれた。まわりの文化の影響を受けることなく、この土地特有の芸術が百年以上かけてはぐくまれてきたが、20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて、その芸術性が、初めてこのコミュニティ外の人々に認められることとなった。今日では、その鮮やかな色使いや大胆な幾何学模様を特徴とする彼らの作品は、展覧会や本などで目にすることができる。

この絵本は、このコミュニティで、祖母やおばたちと一緒にキルト作りにはじめて参加することを許された少女の不安と期待を描いている。彼女は、自分のキルトとして、今まで教わってきたアフリカン・アメリカンの歴史を縫込み、また、Gee's Bend キルターの歩みも学んでいく。

作者がノートで書いているように、キルトはベッドカバーなどとして使われただけではなく、地図や日記でもあった。その例として、上記（19）の絵本で見たように、“the underground railway” の道しるべとしての役割があげられるが、その上に、読み書きを教わることのできなかった人々には、自己表現の手段でもあった、ということである。この絵本の少女も、キルトという表現手段を手に入れ、自分の民族の歴史を、誇り高く次世代に伝えていくのであろう。

(26) Baylor. Byrd, illustrated by Bahti, Tom. *When Clay Sings*. New York: Aladdin Paperbacks, 1972.

有史前、現在のアメリカ合衆国の南西部付近に居住していたアナサジ、モゴロン、ホホカム、

ミンプル族といったネイティブ・アメリカンたちが作った土器の破片が、今も現地で見つかるということである。「かけらのひとつひとつが、ひとの生活の一部で」あり、「自分の歌を持ち、自身の声でうたっている」という考え方が、ネイティブ・アメリカンに根付いており、その歌を聞き取ろうとする努力から、この絵本は生まれた。

茶色、ベージュ、グレー、黒といった砂漠を思わせる色で、実際に発見された土器に描かれたデザインがシンプルに提示されている。そのデザインから、Tom Baylor は大昔の人々の生活を想像し、大自然に対する畏怖のなかで営まれる、大人とこどもの日々のくらしや動物とのつながりを、耳に響きのよい散文詩でうたい上げ、読者を悠久のかなたへと連れて行く。土器のかけらに込められたひとびとの歌を、砂漠を吹くかぜが時に見つけ、現代のわれわれのところに運んでくれる、とする Baylor の歌もまた、力強さにおいて、大昔の人々の歌に引けを取らない。単純化された色やデザインが、この絵本以外にも多くのネイティブ・アメリカンのことについて書いてきた著者ならではの深い理解に支えられたテキストと合体し、はるかかなたの宇宙を示す傑作となっている。

(27) Taback, Simms. *Joseph Had a Little Overcoat*. New York: Viking, 1999.

ユダヤの民話・民謡をもとに、Simms Taback 独自の解釈で作られた楽しい絵本である。ジョゼフは、自分が着ていたコートが古くなったためそれをジャケットに作り変えるが、また着古したので、ベストに作り直す。しかし、それも、また擦り切れてしまう。こうして、コートはどんどん小さなものに変えられ、ついにはボタンに変身させられるが、ジョゼフはそれを失ってしまう。しかし、彼はこのことを本に書き、何も無いところからでもなにかが作りだせる、ということ伝えることにした。

鮮やかな色のコラージュとユーモラスな絵、その上、創意満点のダイカット（打ち抜き）—古くなったものが、次は何に作り替えられるかを読者に予想させるように、ページに穴が開けられている—が、この本を印象的で生き生きとしたものになっている。

(28) Gilman, Phoebe. *Something from Nothing*. New York: Scholastic Inc., 1992.

この絵本は、上記の Taback の作品と同じ民話を用いており、大きい布が小さくなり、ついには無くなってしまいが、最後には、何かが生み出されるというストーリー発展の仕方は同様である。しかし、Gilman の作品は、ジョゼフを子どもに設定し、彼のおじいさんを登場させることで、世代間の関係に重点を置いている点で異なっている。さらに、母親を導入することにより、ストーリーに奥行きがもたらされている。母親は、ジョゼフのジャケットやハンカチなどが汚れたり小さくなったりすると、すぐにそれを処分してしまおうとする人物として描かれており、この母との対照で、ジョゼフやおじいさんの、ものを大切にしようとする態度が浮き上がることになる。

以上から明らかなように、ジョゼフの行動を追う Taback 版に対し、家族の生活に重点を置く Gilman 版では、絵に描かれるものと、その描き方が全く異なっている。Gilman の絵本の場合、このストーリーの展開のかぎであるテキストの繰り返しは、視覚的テキストの繰り返しにより補強され、こうして、この絵本のテーマが強調されることになっている。すなわち、「おじいちゃんなら直してくれる」……「まだまだ何か作れるぞ」というテキストが現れる見開きには、必ず、左ページに、ジョゼフの家の内部の一階と二階を示す絵が、そして、右ページには、その家を外から見た絵が配されているのである。こうして、家庭内で起っていることと家の外での出来事が同時に提示されることで、この家族の生活がイディッシュ・コミュニティの中で営まれているということが強調されることになる。その上、ページのすそには、一階の床下のネズミの家族の生活も描かれている。そこでは、おじいさんが切り落とした布切れをネズミが再利用する様子が展開されており、人間と共存するネズミのグループの生活ぶりが示されている。このように、Gilman の絵本では、コミュニティというテーマを基に、多層的にストーリーが展開している。技法はテンペラ画のようであるが、Taback の原色を生かしたコラージュとは対照的に、茶色を基調としており、ジョゼフを取り巻く家族やまわりのひとびとの暖かさが伝わってくる絵本になっている。

ジョゼフの機智を楽しみ、また絵本作家の創意を味わえるのが Taback の絵本であるとするれば、Gilman の方は、イディッシュ・コミュニティにおける家族のつながりに重点が置かれた作品である。このように、同じ民話の異なる展開を知ること、それぞれの絵本の意とするところがより明確になったと言えるだろう。

(29) George, Kristine O'Connell, illustrated by Stringer, Lauren. *Fold Me a Poem*. New York: Harcourt, Inc., 2005.

作者の Kristine O'Connell George は、1990 年代から子どものための詩を書き、子どもや大人の間で人気のある著名な詩人である。この絵本の扉によると、彼女は、ある少年が色鮮やかな色紙から次々と動物を折っていく様子を見て、折り紙は詩作と似ていると思ったということである。すなわち、注意深く選択した言葉によって、ある情景を生き生きと描き出すことができるように、折り紙の場合、熟考しながら折り重ねていくことで、紙に命を与えることができるということに気づき、そこから、この絵本が生まれたそうである。

絵本は、一人の少年の一日を、彼の折り紙作りをとおしてたどっていく。朝食やランチのテーブルの上で、着替えの途中に、また午後には兄との遊びの中で、夜にはバスタイムや、星が輝く夜、寝る前の読書の時間、そして、ベッドに入って眠りにおちるまで、この少年は、色紙から次々と動物を作り出し、空想の世界を広げていく。その様子が、3～8 行の短詩によりの確に捉えられている。折り紙に夢中になり、その動物に語りかける少年の優しい表情がすばらしい。

イラストを受け持った Lauren Stringer は、この絵本を作るため折り紙を自習し、すべてのモデルを作り、さらにそれを絵に映すという方法を取っている。この手法により、表現に柔らかさが加わり、この絵本の内容にぴったりである。

いろいろな色や模様の折り紙を前にして、どの紙でどんな動物を折ろうかと、ほおずえをついて考えあぐねる少年を描いたページがある。そこに添えられた詩は、「可能性」と題されている。少年の想像力・創造力が、彼の心のなかで駆け巡っている瞬間が、絶妙にとらえられている。それは、まさに、作者自身の姿を映しているのであろう。

Ⅲ. まとめ

以上、母の作品展に合わせて集めた、手芸を表現手段とする絵本、および、手芸・手工芸をテーマとする絵本を紹介してきた。さらに、布で作られた指人形が、ページに開けられた穴から顔を出すという絵本まであったことを付け加えておく。[(30) Kubler, Annie. *What's the Time, Mr. Wolf?*] 整理すると、表現方法も、扱う内容も、また、対象読者も多岐にわたる、いろいろな絵本に出会っていたことがわかる。

内容面について言えば、民族としての歴史や価値観の継承が子どもの手に託されるというのが、一つの主流をなしているように思われる。そこには、子どもが手にする機会の多い絵本というメディアを通して、道をつないでいこうとする大人の期待と努力がうかがえる。

表現手段として手芸が用いられる場合については、手作りされた作品には、あたたかみややわらかさがあり読者に威圧感を与えないということ、そして、用いられる素材の質感が、絵本の雰囲気を作り出すのに大いに関与している、ということが明らかになった。手芸を選択することで、絵本作家は、糸や毛糸、布、紙などさまざまな材料を用い創作に挑む。絵筆の代わりに選ばれた材料には制限もあるが、他方可能性も大きい。出来上がった作品には、手芸でしか生み出すことのできない効果が見られる。しかし、表現手段が絵であれ手芸であれ、絵本を読むと、いや絵本に限らず、どんなジャンルであれ真摯に取り組まれた作品には、共通して感じられることがある。それは、それぞれの作品を作りだすには、膨大な時間とエネルギーが費やされたであろうこと、そして、それが、作品の力になっているということである。制作中に、その作り手のこころのなかに去来したさまざまな思いが、その作品を深化させているのであろう。それを読み取るには、読者の開いた心が必要となる。

母の作品を見ていると、そこには、自分との対話、今まで生きてきた時間、そして、娘やまわりの人々への思いや感謝、また見えないものへの祈りが伝わってくるように思われる。が、何よりも強いのは、作ることの悦びである。母は手を動かして物を作ることで、自分の思いを紡ぎ、ストーリーを描いているのであろう。目に見えないものが形になって表れてくる、それが

作品である。私自身は手で物を作ることはしない。むしろ、作品（今は、特に絵本）からなにかを聴き取り、なにかを見つけ出し、これからその世界へ入っていかうとする仲間のために道しるべを作るのが私の仕事であると思う。

母は、今日も糸で遊んでいる。私も、絵本で遊んでいることにしよう。

Bibliography

- Baylor, Byrd, illustrated by Bahti, Tom. *When Clay Sings*. New York: Aladdin Paperbacks, 1972.
- Brown, Cheryl. *Herbert the Snail*. New York: Van Nostrand Reinhold Company.
- Brüder Grimm. Nietzsche, Gisela, Nietzsche, Peter. *Tischchen Deck Dich, Goldesel und Knüppel aus dem Sack*. Verlag Karl Nietzsche, Niederwiesa, 1978.
- Duffy, Carol Ann, illustrated by Ryan, Rob. *The Gift*. Great Britain: Barefoot Books, 2010.
- Ehlert, Lois. *Hands: Growing up to Be an Artist*. New York: Harcourt, Inc., 1997, 2004.
- _____, *Market Day: A Story Told with Folk Art*. New York: Harcourt, Inc., 2000.
- Flournoy, Valerie, pictures by Pinkney, Jerry. *The Patchwork Quilt*. New York: Scholastic Inc., 1985, 1996.
- George, Kristine O'Connell, illustrated by Stringer, Lauren. *Fold Me a Poem*. New York: Harcourt, Inc., 2005.
- Gilman, Phoebe. *Something from Nothing*. New York: Scholastic Inc., 1992.
- Gleick, Beth, illustrated by Jocelyn, Marthe. *Time Is When*. The U.S.: Rand McNally & Company, 1960; Canada: Tundra Books, 2008.
- Goffstein, M.B. *Goldie the Dollmaker*. Farrar, Straus, Giroux, 1969, 1997.
- Hisey, Jane. *Little Bear's Colours*. Great Britain: Hutchinson, 2002, 2003.
- Jonas, Ann. *The Quilt*. The. U. S.: Greenwillow Books, 1984, Puffin Books, 1994.
- Kubler, Annie. *What's the Time, Mr. Wolf?* UK: Child's Play (International) Ltd., 2003.
- Mckissack, Patricia C., illustrated by Cabrera, Cozbi A. *Stichin' and Pullin' A Gee's Bend Quilt*. New York: Random House, 2008.
- Mortenson, Greg and Roth, Susan L. Collages by Roth, Susan L. *Listen to the Wind: the Story of Dr. Greg & Three Cups of Tea*. New York: Dial Books for Young Readers, 2009.
- Raven, Margot Theis. Pictures by Lewis, E. B. *Circle Unbroken: The Story of a Basket and Its People*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2004.
- Ray, Mary Lyn, illustrated by Cooney, Barbara. *Basket Moon*. 1999. Scholastic Inc., 2000.
- Ringgold, Faith. *Aunt Harriet's Underground Railroad in the Sky*. New York: Scholastic Inc., 1992, 1994.
- Shea, Pegi Deitz, illustrated by Riggio, Anita, stitched by Yang, You. *The Whispering Cloth: a Refugee's Story*. Pennsylvania: Boyds Mills Press, 1995.
- Smith, Sieglinde Schoen, *Mother Earth's ABC: A Quilter's Alphabet & Story Book*, inspired by *Mother Earth and Her Children* by Sibylle von Olfers. Illinois: Breckling Press, 2008.
- Stevenson, Robert Louis, *Selections from a Child's Garden of Verses*. Stiches by Tiffany, Virginia. Wisconsin, Golden Press, 1969, 1975.

- _____, illustrated by Garnett, Eve. *A Child's Garden of Verses*. Puffin, 1952.
- Supple, Elizabeth, illustrated by Bailey, Corinne Ringel. *The Sampler Story Book*. Saalfield Publishing Company, 1934.
- Taback, Simms. *Joseph Had a Little Overcoat*. New York: Viking, 1999.
- Von Olfers, Sibylle. Translated by Zipes, Jack, illustrated by Smith, Sieglinde Schoen. *Mother Earth and Her Children: A Quilted Fairy Tale*. Illinois: Breckling Press, 2007.
- Wegener, Hannelore, Götze, Klaus. *Till Eulenspiegel*. Verlag Karl Nitzsche, Niederwiesa, 1976.
- にしまきかやこ 『ほくたち1ばんすきなもの』 こぐま社, 2003.
- 藤城清治 『ぶどう酒びんのふしぎな旅』 講談社, 2010.
- 堀川波 『Patch Work: ふたりのパッチワーク』 白泉社, 2006.
- 宮沢賢治, 絵/清川あさみ 『銀河鉄道の夜』 リトルモア, 2009, 2010.
- メアリー・レイ・レイ/ぶん, バーバラ・クーニー/え, 掛川恭子/やく 『満月をまって』 あすなろ書房, 2000.